

吉見百穴

5月3日 (金) 晴れ

- ★ 平成から令和にかけて雨が降り続いた。例会予定の平成最後の日も予備日の令和最初の日も雨の予報が出ていたので5月3日に延期したが、3日は快晴、気温もぐんぐん上がって、吉見百穴のある埼玉県熊谷地方の気温は28℃を越える夏日となり、大汗をかきながらの散策となった。参加者は11名であった。
- ★ 所沢駅を9時10分発の電車に乗り本川越駅へ、川越市駅から東上線に乗って東松山駅に着いたのは10時20分であった。駅前から3台のタクシーに分乗して約15分で坂東11番札所である岩殿山安楽寺に着いた。「安楽寺」というよりは「吉見観音」といった方が地元の人には馴染みがあるようで、タクシーの運転手も「安楽寺」ではピンと来ない様子であった。
- ★ 安楽寺は奈良時代に行基菩薩が観音菩薩像を彫って岩窟に納めたのが始まりと言われている。その後806年(大同元年)に坂上田村麻呂によって吉見領の総鎮守とされた。鎌倉時代になって源頼朝の弟・範頼によって高さ48mの三重塔と長さ45m4面の大講堂が建立され、非常に壮大であったと伝えられている。しかし天文年間に北条が秀吉に攻められたとき、近くの松山城が落城し、大伽藍も焼失した。現在の伽藍は江戸時代に再建されたもので、三重塔の高さは23.4mである。
10連休の真っ只中であるが、参拝客が数人いるだけで大変静かである。木々の新緑が美しく、ツツジも満開である。



- ★ 吉見観音から吉見百穴までは歩いた。参道から県道271号に出て西へ向かい、八坂神社の前の丁字路を左折して南へ進む。広い関東平野の真ん中で、周囲には畑が広がっている。畑中の道ではあるが道路はきれいに舗装されていて、時々走り抜ける車も気持ち良さそうである。陽ざしを遮るものもないカンカン照りの道を大分歩くと道標があり、それに従って右折するとやがて林の中の道となり一息ついた。ここまで来ると吉見百穴は指呼の先にあり、吉見観音から約50分、丁度正午に百穴前に到着した。
まず百穴の前の手打ちうどんの店「松音屋」に入りビールで渴きを癒した後、昼食を取って1

時間ほど休憩した。

- ★ 吉見百穴は古墳時代の終わりごろ、6世紀末から7世紀後半に造られた横穴墓で、1923年に国の史跡に指定された。丘陵の斜面を掘削して墓としたもので、現在219基の穴が確認されている。横穴墓は大きさも形も様々で、お棺を安置した棺座も単棺座、2棺座、3棺座など多様である。沢山の穴が掘られた丘の斜面の眺めは異様な感じがする。

吉見百穴とその周辺には太平洋戦争末期、アメリカ軍の空襲を避けながら航空機のエンジン部品を製造するための大規模な地下軍需工場が作られた。

また横穴にはヒカリゴケが自生しているところもある。ヒカリゴケは外から入ってくるわずかな光をレンズ状の細胞が反射して黄緑色に光って見えるもので、国指定の天然記念物となっている。私も覗いてみたが、光っているようにも見え、光っていないようにも見えるものであった。



- ★ 百穴から100mほどの道路脇の崖の上に岩室観音堂が建っている。弘法大師が岩窟にお堂を建て観音像を納めたのが始まりだという。急な崖の途中に造られたお堂は、懸造りと言われる山門のような造りで、一階の真ん中は通路になっていて、両側に四国八十八か所になぞらえた48体の石仏が安置してある。ここにお参りに来れば四国八十八か所にお参りしたのと同じ功德が得られるという。急な階段を登って二階に登ると正面に御本尊が奉ってある。ここからは菜の花が咲き乱れる市野川の向こうに松山市街を望むことができる。



- ★ 一階の通路を抜けるとその先はさらに急峻な山道となっている。左手には鎖のかかった道があり、胎内くぐりとなっている。胎内くぐりをすると子宝・安産・子育ての願いが叶うというが、我々にはもう縁がないと思っていたが、T氏とH氏はまだ子宝が欲しいらしく胎内くぐりをしていた。

山道を登って行くと武蔵松山城跡に行けるようだが、余りに急な道なので皆尻込みをしていると、若くて元気のあるS氏とN氏が登って行った。N氏によると、本丸、二の丸などの曲輪の跡や曲輪を隔てる空堀が残っているという。松山城は室町時代から戦国時代にかけて、北条、上杉、武田などによる幾多の戦乱の舞台となった。1590年、豊臣秀吉が北条を攻めたときに松山城も落城・炎上し、近くの安楽寺や岩室観音堂も焼失している。



胎内くぐりへの鎖場



胎内から出てくるH氏



武蔵松山城跡

★ 百穴前バス停からバスに乗り 10 分ほどで東松山駅に戻ってきた。駅の西口から歩いて数分の所に箭弓（やきゅう）稲荷神社がある。712 年（和銅 5 年）の創建と伝えられる古い神社で、平安時代の中頃、平忠常の謀反を鎮圧した源頼信が社殿を建て替えたという。五穀豊穰、商売繁盛、家内安全の守り神として信仰を集めているが、「やきゅう」という音にちなんで野球関係者の参拝も多いという。

境内にはぼたん園があり、丁度ぼたんまつりの最中であつたが、残念ながら花の見頃は終わったようである。藤やつつじが見頃であつた。



箭弓稲荷神社



藤棚



つつじ

東松山駅発 15 時 12 分の電車で帰途についた。

俳句クラブの方から俳句を頂きました。

柿若葉 古墳の里を そぞろ往き 金子 正男

燕の子 遺跡の穴に 飛び交いて

竹林を 覆ふが如き 野藤かな 志賀 勉

百穴の 奥都城なりや 花は葉に

街道の 地藏北向く 柿若葉 流牧

匂ひ立つ 紫を掌に 藤の花

花びらを 風にほどきし 白牡丹

横穴や 冷気流れて 春惜しむ 辻 直邦

ぼうたんの 赤白黄いろ 競ひけり

春暑し バットとベースの 絵馬並ぶ

参加者 奥野和雄、金子正男、河合宏則、古賀良郎、小島恕雄夫妻、志賀勉、辻直邦、
滑志田隆、原田一彦、安村長生、 以上 11 名

写真と文 小島恕雄